原著論文

特別支援学校の教員の介助犬認知度に関する調査

田辺 冬華¹⁾、山口 歩¹⁾、遠藤 大輔¹⁾、水上 言¹⁾、高柳 友子¹⁾、
後藤 優花¹⁾、水谷 悠美¹⁾、野口 裕美²⁾、野下 朋美³⁾

1) 社会福祉法人日本介助犬協会

2) 学校法人・専門学校名古屋医専

3) 社会医療法人総合大雄会病院

A Survey on Awareness of Service Dogs among Teachers of Schools for Physically Disabled Children

Fuyuka Tanabe¹⁾, Ayumi Yamaguchi¹⁾, Daisuke Endo¹⁾, Koto Mizugami¹⁾, Tomoko Takayanagi¹⁾,
Yuka Goto¹⁾, Yuumi Mizutani¹⁾, Hiromi Noguchi²⁾, Tomomi Noshita³⁾

1) Social Welfare Corporation, Japan Service Dog Association

2) Educational Foundation, Technical School, Nagoya Medical College

3) Social Medical Corporation, Daiyukai Hospital

抄 録

全国で活動している介助犬は74頭（2015年8月現在）と未だ十分に普及しているとは言えず、理由の一つとして障害当事者の認知度の低さが考えられる。より若年者に自立や社会参加の手段の一つとして介助犬という選択肢を提供することで未来の介助犬使用者の発掘にもつながるのではないかと考え、将来介助犬使用者になり得る生徒がいる特別支援学校（肢体不自由）の教員を対象に介助犬の認知度についてアンケート調査した。結果、メディア等により介助犬は聞いたことはあるが正しい理解や具体的なイメージを持っていない教員が多いことが明らかになった。今後の啓発方法としては、介助犬を正しく知って貰えるように、介助犬総合訓練センターでのイベントの開催に限らず、特別支援学校向けの資料の作成・配布、特別支援学校へ出向いてのデモンストレーションや使用者による講演といった自分の目で見たり聞いたりできる機会の提供が必要であると考えられた。

キーワード：介助犬、特別支援学校、教員、啓発活動、デモンストレーション

Abstract

Currently 74 service dogs are working in Japan (as of Aug. 1, 2015). This number is far less than that of potential users. One of the reasons for the discrepancy is the poor awareness about service dogs among potential physically disabled users. Educating the young physically disabled about service dogs as one of the helps for independence and social participation may lead to an increase in future service dog use. In this study, therefore, we conducted a survey on the awareness of service dogs among the teachers of schools for physically disabled children - possible future service dog users. The result showed that most of them lacked correct understanding and specific image of service dogs though they knew the presence of the dogs through media coverage. In addition to our current promotion method of hosting events at the Service Dog Training and Rehabilitation Center in Aichi Prefecture, to improve our promotion methods, distribution of the brochures and the demonstration and the lecture by service dog users held at the schools should be provided.

Keywords: service dog, schools for physically disabled children, promotion activity, demonstration

I. 序論

盲導犬、介助犬及び聴導犬からなる身体障害者補助犬は、身体障害者の自立及び社会参加の促進に寄与する「生きた補装具」であると考えられる。

介助犬を使用する障害者は肢体不自由者であり、2006年の厚生労働省の身体障害者調査では176万人を数える¹⁾。その内、介助犬の必要性が考えられる身体障害者障害程度等級の1級と2級即ち、上下肢、体幹の機能の著しい障害を示す障害者数は1級44万9000人、2級が31万2000人を示し、総計76万1000人に達する¹⁾。この全ての人が介助犬使用適応者ではないが、介助犬の使用によって自立、社会参加、社会復帰が期待できると考えられる障害者は多い²⁾。それに対し、全国で活動している介助犬は74頭³⁾であり、未だ十分に普及しているとは言えない。介助犬という存在自体を知らずに手を挙げられない障害者、知っていても自分の障害の程度では持てないのではないかと考えている障害者が多いなど、介助犬が普及していかない原因の一つとして障害当事者の認知度の低さや正しい理解の不足が考えられる。

介助犬は障害者の自己管理能力と経済効果、さらに介助犬の経済性の観点から年齢制限が必要となり、18歳以上とするのが一般的であるが²⁾、介助犬使用者となり得る障害当事者（成人）に対する介助犬への興味や期待、不安について、大林らは全国自立生活センターの会員102名を対象とした意識調査を1999年に実施し、介助犬を知っている障害者は95%、テレビで知った回答者が75%。回答した障害者の4分の3が介助犬に興味があり、4分の1が介助犬をほしがっていることを報告している⁴⁾。

近年障害の重度化・重複化に伴い、特別支援学校（肢体不自由）においては7割を超える高い重複障害学級在籍者率が報告されている⁵⁾という現状がある中で、特別支援学校の生徒における介助犬の有効性の把握、それに伴う啓発活動の有効性や方法の検討、さらには、より若年者に自立や社会参加の手段の一つとして介助犬という選択肢を提供することで、将来の介助犬使用につながるのではないかと考え、生徒や保護者に対して強い発信力を持つ特別支援学校（肢体不自由）の教員を対象にアンケート調査を行うこととした。

II. 方法

2014年1月14日～2月14日にかけて、三重県の特別支援学校（肢体不自由）の教員120名を対象として郵送によるアンケート調査を実施した。アンケートは回答者個人が特定されないよう無記名式とした。調査内容としては、①回答者属性②介助犬について③生徒について④授業についての4分野15項目において選択及び自由記述による質問を行った（表1）。

III. 結果

1. 回答者属性

本調査は、120名中50名（男性20名、女性30名）から回答を得た。年代は40～50代が57%、20～30代41%、60代は2%であった。教員歴は21年以上が37%と最も多く、次いで1～10年が35%、11～21年が22%、1年未満は6%であった。

2. 介助犬に関する理解

介助犬の認知度としては「知っている」「少し知っている」が共に42%、「よく知っている」4%、「聞いたことがある」12%で、「知らない」との回答はなかった（図1）。

図1：介助犬の認知度

介助犬を知ったきっかけは、「テレビ」が84%と最も多く、次いで「新聞」が52%、「本・雑誌」42%、「インターネット」と「介助犬に関するイベントに参加した」が共に4%、「その他（DVD、知人の話）」が4%という結果であった（図2）。

表 1：アンケートの質問項目一覧

「肢体不自由児特別支援学校の教員に対する介助犬に関する調査」

このアンケートは、肢体不自由者の自立や社会参加のお手伝いをする「介助犬」の認知度や理解度、肢体不自由児特別支援学校の児童生徒における介助犬の有効性の把握、それに伴う啓発活動の有効性や方法の考察を目的に実施致します。

以下の質問に対して該当するものを選び、番号に○をつけてください。また、枠がある場合には自由に記述してください。

【回答者属性】

1. 回答される方ご自身についてお答えください。

性別：1) 男 2) 女

年齢：1) 20代 2) 30代 3) 40代 4) 50代

教員歴：1) 1年未満 2) 1～5年 3) 6～10年 4) 11～15年 5) 16～20年 6) 21～25年 7) 26年以上

【介助犬について】

2. 介助犬について知っていますか？

1) 良く知っている 2) 知っている 3) 少し知っている 4) 聞いたことがある 5) 全く知らない

・ 1) ～4) と答えた方は、どのような方法で知りましたか？（複数回答可）

1) テレビ

2) 新聞

3) 本、雑誌

4) インターネット

5) 介助犬に関するイベントに参加した

6) その他（ ）

3. 介助犬についてより詳しく知りたいと思いますか？

1) はい 2) いいえ

・ 1) と答えた方は、具体的にどのような方法で知りたいですか？（複数回答可）

1) デモンストレーション（お仕事紹介）を実際に見る

2) 介助犬育成施設の見学に行く

3) 大使用者のお話を聞く

4) 介助犬育成団体が主催しているイベントに行く

5) ネットや本から情報を得る

6) その他（ ）

4. 介助犬に対してどのようなイメージを持っていますか？（複数回答可）

1) 利口である 2) 番犬になる 3) 気持ちいが安らぐ 4) 一緒に遊べる 5) 介助をしてくれる 6) 精神的な支えになる 7) 連れて歩くと格好がいい 8) 世話が大変 9) 吠え声がうるさい 10) 臭い 11) 怖い 12) 汚い 13) 毛が抜ける 14) 飼育費用がかかる 15) 厳しい訓練をしている 16) 食品売り場などに入ってほしくない 17) 犬に仕事をさせることに反対 18) その他（ ）

5. 介助犬の介助作業としてどのようなものがあると思いますか？（複数回答可）

1) 指示した物を持ってくる 2) 車椅子の牽引（段差・坂道） 3) 階段昇降介助 4) 歩行介助 5) 電気等のスイッチ操作 6) 冷蔵庫・引き出しから指示されたものを持ってくる 7) ドアの開閉 8) 衣服や靴下を脱がせる 9) 起き上がり・立ち上がり・移乗介助 10) 落とした物を拾う 11) 緊急時の対応（携帯電話を持ってくる・緊急通報のスイッチを押す・人を呼びに行くなど） 12) 段差や障害物、曲がり角を知らせる 13) 排泄介助 14) 音を知らせる 15) 入浴介助 16) 食事介助

6. 介助犬がしてくれたら役立つと考えられる介助作業はありますか？具体的にお答えください。

7. 介助犬が適応する障害としてどのようなものをイメージしますか？（複数回答可）

1) 脳性麻痺 2) 筋ジストロフィー 3) 先天性股関節脱臼 4) 先天性ミオパチー 5) ポリオ 6) 二分脊椎 7) 先天性骨形成不全症 8) 脳血管障害 9) パーキンソン病 10) 多発性硬化症 11) 筋萎縮性側索硬化症 12) 全身性エリトマトーデス 13) 関節リウマチ 14) 脊髄損傷 15) 脳外傷後遺症 16) 変形性股関節症 17) 脊髄小脳変性症 18) 重症筋無力症 19) その他（ ）

8. 介助犬が適応しないと思われる障害の程度として当てはまるものはありますか？（複数回答可）

a. 身体の状態 1) 対麻痺（両下肢の麻痺） 2) 四肢麻痺 3) 片麻痺

b. 合併症 1) 言語障害 2) 知的障害 3) 精神障害 4) 発達障害 5) 高次脳機能障害

【児童生徒について】

9. 担当しているクラスの児童生徒の数は何人ですか？（ ）人

10. 担当しているクラスの児童生徒の疾患として該当する番号に○をつけ、（ ）に人数を記入してください。該当しない場合は、6) に疾患名と人数を記入してください。

1) 脳性疾患（脳性麻痺、脳外傷後遺症 等）（ ）人

2) 筋原性疾患（筋ジストロフィー、先天性ミオパチー 等）（ ）人

3) 脊椎脊髄疾患（二分脊椎、脊髄損傷 等）（ ）人

4) 股関節疾患（先天性股関節脱臼、変形性股関節症 等）（ ）人

5) 骨系統疾患（先天性骨形成不全症 等）（ ）人

6) その他（ ）（ ）人

11. 知的障害を合併している生徒はいますか？ 1) の場合は（ ）に人数を記入してください。

1) はい 2) いいえ（ ）人

12. 児童生徒の自立や社会参加の一つの手段として、介助犬が有効であると考えますか？

1) はい 2) いいえ

理由

【授業について】

13. 生徒の自立や社会参加に向けてどのような授業や取り組みを行っていますか？具体的にお答えください。

14. 授業の中で、介助犬に関して取り上げたことはありますか？

1) はい 2) いいえ

・ 1) と答えた方は、どのような授業を行いましたか？内容を具体的にお答えください。

・ 2) と答えた方は、なぜ取り上げたことがないのですか？

1) 介助犬自体を知らなかったから

2) 担当している児童生徒には有効でなかったから

3) 取り上げたいと思ったが、機会がなかったから

4) その他（ ）

15. 今後、授業の中で介助犬を取り上げたいと思いますか？

1) はい 2) いいえ

理由

・ 1) と答えた方は、どのような方法で介助犬を取り上げたいと思いますか？（複数回答可）

1) デモンストレーション（お仕事紹介）を実際に見る

2) 介助犬使用者のお話を聞く

3) 介助犬育成施設に見学に行く

4) 生徒自身に介助犬について調べさせる

5) 教員が知識を身に付け生徒に伝える

6) その他（ ）

※最後に、ご質問や要望、ご意見等がございましたらご自由にご記入下さい。

—アンケートは以上です。お忙しい中ご協力して頂き、誠にありがとうございます。—

図2：介助犬を知ったきっかけ

介助犬に対するイメージでは、「精神的な支えになる」と「利口である」がそれぞれ8割を超えプラスのイメージが上位を占めた一方、半数の人は「厳しい訓練をしている」というマイナスのイメージを持っていることが明らかとなった（図3）。

図3：介助犬に対するイメージ（複数回答）

介助犬の作業を複数回答で尋ねたところ、介助犬の作業に加え、盲導犬・聴導犬の作業も同時に選択するなど、介助犬の作業と盲導犬・聴導犬の作業とを混同している教員が54%にも上った。

3. 介助犬の有効性

生徒の疾患について、教員50名中37名から回答を得た（有効回答率74%）。担当している生徒全体の7割を占める脳性疾患のうち、大半は知的障害や言語障害などを合併することの多い脳性麻痺であり、知的障害を合併している生徒の割合は82%であった。このような生徒において、「介助犬が有効であると考えるか」と聞いたところ、「いいえ」と答えた38%のうち、約7割が生徒の障害の程度や状態を理由としており、その中でも最も多かったのがコミュニケーションの問題であった。しかし「い

いえ」と答えた方の中でも、「本人や家族が希望すれば」「もっと詳しく知りたい」という意見もあった。

4. 介助犬への関心

これまでに「介助犬について授業で取り上げたことがある」と回答したのは4%のみで、取り上げたことのない理由としては「担当している生徒に有効でないと思う」が40%を占めた。また、「説明の方法や内容がわからなかった」といった意見もあった。さらに、「今後授業で取り上げたい」と答えた26%（13名）にその理由を聞いたところ、「利用できるサービスをより多く知る必要がある」「有効な生徒に出会ったら取り上げたい」といったものがあった。逆に、「取り上げたいと思わない」と答えた方の理由としては、障害の程度や介助犬の知識不足があげられた。しかしここでも、「生徒や保護者が求めていると一緒に取り組む」といった前向きな意見があった。

また、全体の68%が「介助犬についてより詳しく知りたい」と答えており、介助犬に対する関心の高さが伺えた。介助犬の理解の促進の手段としては、「デモンストレーションを実際に見る」が61%と最も多く、次いで「介助犬使用者のお話を聞く」39%であった（図4）。

図4：介助犬の理解促進の手段（複数回答）

さらに、「介助犬を授業で取り上げたい」と答えた26%に授業で取り上げる際の手段の希望を聞いたところ、「介助の理解の促進の手段」と同様、「デモンストレーションを見る」「使用者のお話を聞く」が上位であった（図5）。

図5：授業で取り上げる際の手段（複数回答）

IV. 考察

介助犬を必要とする障害者の疾患として、主に脊髄損傷、多発性硬化症、神経筋疾患、筋疾患（筋ジストロフィー等）、神経難病（パーキンソン病、脊髄小脳変性症）、筋萎縮性側索硬化症等）、脳血管障害等が挙げられる²⁾。

今回調査を行った特別支援学校（肢体不自由）においては、脳性疾患（脳性麻痺、脳外傷後遺症等）が68%を占め、次いで筋原性疾患（筋ジストロフィー、先天性ミオパチー等）6%、骨関節疾患（先天性股関節脱臼等）4%、脊椎脊髄疾患（二分脊椎、脊髄損傷等）3%、骨系統疾患（先天性骨形成不全）2%、という結果となった。これは2000年に行われた児童生徒病因別調査（全国肢体不自由養護学校校長会編）⁶⁾の割合とほぼ同様になっている。

脳性疾患の中でも大半を占める脳性麻痺は、運動障害に加え言語障害や知的障害も伴うことが多く、症例によりきめ細やかな対応によって介助犬の訓練を行わなければならない²⁾。また、介助犬を貸与するにあたっては、介助犬が本人にとって社会参加と自立、社会復帰に寄与する手段であるかどうか、より有効性を見極めることが求められると予想される。障害の程度やコミュニケーション手段の不足を理由として「介助犬は有効でない」と考える教員が約4割を占めた一方、介助犬についての関心は高く、正しい知識を身に付けたいという意見も多くあった。このことから、特別支援学校（肢体不自由）において介助犬が適応する生徒は限られるが、教員に対して啓発の有効性があることが明らかとなった。

また、本調査により特別支援学校（肢体不自由）

の教員において、介助犬という言葉「全く聞いたことがない」と答えた回答者はおらず、介助犬の認知度は高いことがわかった。しかし、盲導犬や聴導犬の作業と介助犬の作業を混同している教員が約半数、「厳しい訓練をしている」といったイメージを半数近くの教員が持っているなど、介助犬に関して正しい理解ができていないことが明らかとなった。その原因としては、活動している介助犬が少なく遭遇の機会が少ないこと、イベントなどの介助犬を知ることのできる機会の不足、マスメディア以外の本や雑誌、学校向けの資料などでの正しい情報提供の不足などが考えられる。

今後の啓発方法として、より正しく介助犬を知って頂けるよう特別支援学校向けの資料作成・配布、デモンストレーションや使用者の講演といった自分で見たり聞いたりできる機会の提供が必要であると考える。また、介助犬訓練センターのある愛知まで足を運ぶことが難しい障害者もいるため、特別支援学校に出向いての啓発活動等も必要であるとする。

今後、さらに他の特別支援学校（肢体不自由）での調査を行い、地域ごとの認知度を比較検討する他、障害の種類・程度割合から見た学校ごとの比較検討を行い、特別支援学校向けの体験会等のイベントも企画していきたい。

V. 謝辞

本調査の主旨に同意頂き、アンケート実施にご協力いただきました特別支援学校教員の皆様に心から感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省ホームページ 平成18年「身体障害児・者実態調査結果」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/index.html>
- 2) 高柳哲也編（2002）『介助犬を知る』名古屋大学出版会
- 3) 厚生労働省ホームページ 「補助犬別実働頭数（H27.7.1現在）」<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syakai/hojyoken/html/b04.html>
- 4) 大林博美、高柳友子、樋口恵子・他（1999）障害者の自立生活を支援する介助犬の導入に関して—外出頻度の高い障害者の介助への意識調査—。平成11年度厚生科学研究障害保健福祉総合研究事業 介助犬の基礎的調査研究報告書、27-35

- 5) 文部科学省ホームページ「特別支援教育資料
(平成18年)」[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/
tokubetu/material/013.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/013.htm)
- 6) 全国特別支援 肢体不自由教育校長会ホーム
ページ「児童生徒病因別調査」[http://www.
zentoku.jp/tokusyu/index.html](http://www.zentoku.jp/tokusyu/index.html)